

いけしまたなか 「池島譚歌」インタビュー

6月1日からユナイテッドシネマ長崎で公開される「池島譚歌」。長崎が大好きで、地元の東京よりも長崎にいる時間が長いと語る荻野監督、東さん。はじめて演技に挑戦した諫早市在住の田中達也くん「池島譚歌」についてインタビューしました。



■最初に池島に注目したきっかけは？

荻野：日本のエネルギー革命の観点から、もう一度日本を見直してみたいという想いがあったので炭鉱を探していたんです。近代の歴史で一番大切なことは自分の親がどのような戦後の日本を乗り越えてきたかということ、石炭は重要な役割を果たしてきたものであり炭鉱に関わる映画を作りたいと思いました。その際に出会った池島の方々はすごく人が良く、池島という名の由来は島の真ん中に池があったため、日本の近代化に伴いそこを海へと繋げて船での運搬の基点としていたんです。その池を最初に見た時に、女性の出産をイメージしたのが最初に描いていたテーマとは気持ちが変わって「ここで親子の絆をテーマにした映画を撮ろう」と決めました。

■「親子の絆」をテーマにしようと思った理由がありますか？

荻野：人間というのは、次の世代に何を残すのかをテーマに生きていくものだと思うんです。それは未来に繋いでいくものであると思うし、映画も同じで100年後もどこかで誰かに観ていただき、メッセージを送ることができると思っています。母から子供へ、そしてその子供からまた子供へと受け継がれていくという意味でそのつながりをテーマにしました。

■この映画の見所、魅力を教えてください。

荻野：その場所で撮るといことは、そこに住んでいる人たちやその土地の性格を撮るといことであって、他のところから人を連れてくるとそれは違和感になると思うんです。そこにはこだわりがあったんですね。演技がうまいかどうかは関係ないと思うし、立ってるだけでそこに雰囲気があれば一番自由だしその点ではない形でできたと思っています。メインの4人の子供たちは全員長崎の子です。長崎っ子らしい雰囲気大事にしたかったんです。オーディションの時も、子供さんはもちろんですが親子の関係も見ているんです。親子がすごく仲良い家庭で、子供と一緒に一生懸命協力してくれるご家庭じゃないと難しいですね。ご家族とスタッフの関係がしっかりしなければ無理な部分なので、子供たちがすごくいい演技をしてくれたのは、本人の頑張りももちろんですがご家族の力も大きかったと思います。特に長崎の人達に見ていただきたいと思えますし僕らの目線で撮った長崎なので「こんな風に見えるの？」と思う部分はあるかもしれないですが、お互いの目線が混ざり合っている感じが仕上がっていると思います。長崎で生まれて長崎で育った映画であり、地元の方の協力がなければ撮れない作品でしたし、長崎の人々に撮らせてもらったという思いでいます。

■主役を演じてみて大変だったことは？

田中：最初、主役に決まった時は「え!?オレが!?」と思いました。映画の最初と最後ですごく走るところがあるんですが、何度も何度も走って大変でした。

■役作りの部分で苦労したことは？

東：私は謎の女性という役だったんですが、自分が経験したことのない役で雰囲気作りと魅力を出すのがすごく難しかった部分ですね。

■この映画に出演して、良かったと思うことはありますか？

田中：池島を知ることができたことです。撮影の合間にみんなで水遊びをしたり、お土産さんでアイスを食べたり！当たりが一つもなくて悲しかったけど…(笑)

東：長崎を知れたことです。東京から来て感じたことは人を受け入れる包容力でした。都会の中では失われてしまっているものでしたし、この映画作りを通してスタッフや長崎の人みんな協力できたという達成感を感じています。長崎の人達に出会えて良かったと思っています。「ほっ」とできる心地良さのある場所です。

■今回の撮影ではギネス記録に挑戦されたというのですが？

荻野：レール移動距離1kmということに挑戦しました。映画というのは庶民の文化ですから観るためだけのものではないですよ。道で撮影したら誰もが足を止めるし参加してもらいたいと思っています。手が届かないところにあるように見えるけどももっとも多くの人に参加してもらいたいと思うなかで、何かを一緒にやろうという気持ちから考えたことでもあるんです。

「1キロ」にこだわったのは、「キロ」を漢字で書くと「帰路」であり「岐路」です。それは今回の映画という家族ではないかと思っています。家族は戻る場所でもあるし、旅立つ場所でもありますよね？そういう意味合いでチャレンジしたんです。みんなで世界に挑戦する姿を子供たちに見せるべきではないかと考えました。

■今後長崎を舞台に映画を撮る予定は？

荻野：実は長崎で、あと2本の映画を撮ろうと思っています。長崎に来ると、東京ではわからなかった魅力を感じるんですよ。いろんな方と知り合って長崎のことを知れば知るほどもっと撮りたいと思えますし、いろんな良い場所があることを知ると欲が出ますね。1本撮って終わりではなく3本くらい撮ると一つの形になってくるのかなと思っています。長崎はいろんな文化が混ざって新しい文化ができていく素晴らしい街だと思えますし、東京で人と混ざり合うことができない人たちに長崎の魅力を伝えられるようなもっと良い映画が撮れそうな気がしますね。キャストももちろん今回と同じで撮影したいので、諒一が大きくならないうちに撮りたいです(笑)



監督：荻野欣士郎(おぎの きんしろう)
昭和45年5月3日生まれ。日本映画監督協会会員。駒澤大学経済学部経済学科卒業後、脚本家としてデビュー。「私の骨」で映画監督になる。「浅草堂酔夢譚」はモナコ国際映画祭でIndependent Spirit Awardを受賞。

主演：田中達也(たなか たつや)
10月24日生まれ。真津山小学校6年生。特技はサッカー。

主演女優：東さや香(ひがし さやか)
9月2日生まれ。「福島さん」「歳時記」(監督：荻野欣士郎)への出演を経て、長編映画での主演は本作がはじめてとなる。

■最後にface読者へのメッセージをお願いします。

東：長崎の魅力がたくさんたくさん詰まった映画なので、そこを覗いていただきたいです。

田中：頑張って走ったので、ぜひ観に来て下さい！

荻野：長崎への感謝状なので、それを受け取ってもらえたらと思います。僕らを見かけた時には「長崎の人になったね」と言っていただけだからすごく嬉しいんです。多くの人に観ていただきたいと思いいつ1000円で観ることができると映画に仕上げたので、気軽に足を運んでもらえたらと思います。